



# 慶應言語学 コロキウム

慶應義塾大学言語文化研究所  
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

## 音韻階層構造と外在化

キーワード：併合，音韻範疇，関係性特性，  
階層構造，語彙化，外在化

講師：那須川 訓也 氏 (東北学院大学)

[日時] 2019年4月20日(土)・21日(日) 13:00-18:30

[会場] 慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

\*参加費無料・事前申込不要 (会場にて参加者カードへの記入が必要となります)

### 概要

生成文法理論では、人間言語が呈する構造は、併合 (merge) を回帰的に適用することにより生成される、と考えられている (Chomsky 2010)。この操作は、語彙項目 (形態素) を対象に行われ、音韻的範疇はその対象とは見做されてこなかった。これは、複数の分節音が線的に並べられたもの、もしくはその線的に並べられた分節音の連続を基盤として構築されたものが音韻構造である、と考えられてきたからである。よって、多くの研究において、統語構造と音韻構造は、本質的に異なるとされてきた (Bromberger & Halle 1989 他)。

これに対し、Nasukawa (2017a) では、今まで形態素を構成すると考えられてきた音韻範疇の種類と数が精緻に見直され、音韻構造も、音韻的範疇を対象とし併合が回帰的に適用されることで構築される、と主張されている。この音韻系における階層構造の構築は、形態素を語彙化する際に実行されると考えられている。本コロキウムでは、併合による音韻構造構築過程、および、階層構造を外在化する仕組みを、いくつかの音韻現象の分析を通して論じる (Nasukawa 2017bc)。

### 第1日目

#### 言語機能における音韻系の位置づけ

統語演算系は、語彙項目だけでなく、(今まで統語演算系において不可視であると見做されてきた) 音韻範疇も回帰的併合の対象と考える根拠を論じる。

#### 併合の対象となる音韻範疇

次に、併合の対象となる音韻範疇 (素性、音節、等) について論じると同時に、それらの範疇同士が併合されることで、どのような音韻構造が構築されるかについて論じる。

### 第2日目

#### 階層構造の外在化

併合により構築される音韻階層構造の外在化の仕組みを、範疇間の卓立・非卓立関係と線形化の観点から論じる。形態・統語構造の外在化についても触れる。

#### 音韻階層構造を用いた音韻現象の分析

併合により構築される音韻階層構造を用いて、長年問題視されてきた音韻現象 (母音弱化和子音軟化等) を分析し、その妥当性を論じる。

### 参考文献

- Bromberger, S. & M. Halle. (1989). Why phonology is different. *Linguistic Inquiry* 20, 51-70.  
Chomsky, N. (2010). Some simple evo devo theses: How true might they be for language? In R. Larson, V. Deprez & H. Yamakido (eds.) *The Evolution of Human Language: Bilingual Perspectives*, 45-62. Cambridge: Cambridge University Press.  
Crosswhite, K. (2001). *Vowel reduction in Optimality Theory*. New York/London: Routledge.  
Nasukawa, K. (2017a). Extending the application of Merge to elements in phonological representations. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 21, 59-70.  
Nasukawa, K. (2017b). The phonetic salience of phonological head-dependent structure in a modulated-carrier model of speech. In B. Samuels (ed.) *Beyond Markedness in Formal Phonology*, 121-152. Amsterdam: John Benjamins.  
Nasukawa, K. (2017c). The relative salience of consonant nasality and true obstruent voicing. In G. Lindsey & A. Nevins (eds.) *Sonic Signatures: Studies dedicated to John Harris*, 146-162. Amsterdam: John Benjamins.